

## 歩 く

浜田 道雄

歩く 私の前には澄んだ深い青空が広がり 足元には晩秋の陽射しを照り返す白い路が伸びている 私はいまこの路を一人黙々と歩く 顔に吹き寄せる風はもう冬が近いのだぞと知らせる冷たさだが 背中にあたる陽射しはまだ秋の温もりを伝えて 心地よい 首筋がほんのりと温められ 私は歩く元気を貰う

私は歩く 背筋を伸ばして 前を向いて歩く  
なんのために？ わからない  
毎日歩かなければならぬと思うから ただこうして歩いている

あたりはしばらく前までは野菜畑が広がる田園だった  
道の脇には低い茶の木が植えられて 季節には白い小さな花をつけた  
だがいつの間にか ちまちました小さな家々が建ち  
いまでは猫が背中をこすりながらようやく通り抜けられるほどの隙間をあけて 家々は並んでいる

互いに低い塀をめぐるして ここはおれの領分だぞとせめぎあっている  
そんな家でも人は道端に花を植え 歩く人々を楽しませる気持ちをまだ残している

そんな路を私は歩く 前を向いて歩く 後は見ない  
後を見てなにになろう 己が歩いてきた時間のカスが転がって ガラガラと音を立っているだけではないか

なかにはきれいに見えるカスがある それを人は成果という  
一方クシャツとつぶれた残骸もある 人はそれを失敗とあざ笑う  
でも それが成果であろうが 失敗であろうが、私は気にしない

後を振り返ってなにになろう

過ぎ去った時間のカスはいじり直し 飾り直すことなどできはしない  
自分の過去を化粧し直し 美辞麗句で飾って誇ったとて何になろう  
過ぎ去ったものは隠しようもない  
あるがままのものとしてそこに置くしかない

私は歩く 背筋を伸ばして ただ前を向いて歩く  
路の先はもうそんなに遠くはない  
時間だってわずかしが残ってはいない

残った路が 時間が 尽きるまでに何ができるのか 何をしたいのか  
私はそれだけを考えながら 路を歩きつづける  
この秋の日の空を真っ直ぐに見つめながら